

時の流れと釜ヶ崎

岡野雲助

一、公益質屋

南花園市場（いづみやの裏）商店街のまんなかあたりに、今宮公益質屋というのがありました。数年前から休業状態であったのが、ついに廃止になり現在解体工事をやっています。

公益質屋というのは、大正七年に米騒動があつて、その後北区の天六にある北市民館に開設されたのを皮切りに、大阪市が数ヶ所に設けたものです。

低い利息で小額の金銭を貸し出す制度で、低所得生活者の多い地域につくられたもので、今宮公益質屋も、当時今宮村といわれた釜ヶ崎の近くにつくられたものです。

米騒動がきっかけとなって、その対策として公設市場がつくられたり、役所が質屋をはじめたり、というのが日本の役人のやる行政対策で、釜ヶ崎に暴動がおきるとその対策に「あいりん」という愛な地名をこしらえ、あ

いりん労働福祉センターという、職業安定法違反を公然とやれる施設を政府と大阪府が共同でつくるといふ、昔も今も変わらぬ役人の低能ぶりです。

公益質屋のつぶれたのは、質屋が衰えてきて、衣類などは流れても処分に困るので預ってくれなくなり、低い金しか貸してくれなくなったのと、サラリーマン金融という簡単に小金を借りられる金貸しがふえたことなどによるものといわれています。

公益質屋に限らず、町の一般の質屋も同じように営業不振で廃業するものがふえているといふことです。

ただしこれは釜ヶ崎以外のところのことで、釜ヶ崎ではそれでもないようです。

最近こんな話をききました。

ウールの衣類を三千円で釜の質屋に入れたが、本人にとっては大切な品物で流したくなかったもので、ずっと利息を払って五十九ヶ月あずけていたそうです。その間に

払った利息が一万五千円余り、三千円借りて利息が一万五千円。質屋という商売はよくもわるんだなあと思う

反面、よくまあ根拠よく利息を払ったものだと思心した。

これには余談が一つ、ウールなどは永く置くと虫くいがあくものですが、五十九ヶ月もあずけておいて、虫くいの一つたかつたと受出した人が感心していたということです。

二、結核

ずっと以前結核療養所であつたところが最近は大ていアル中専門の病院に変わっている。結核はなくなりつつある。もはや過去の病氣だといわれています。

世間一般ではそうであつても、これも釜ヶ崎では別なように、結核はふえているようです。

原因はまだ誰も詳しく調査してはいないようですが、最近釜のドヤで、全館冷暖房というのでふえています。

ドヤの入口から内に向けて冷暖房をかけ、全館を閉めきつてあるあのやり方は、空気の入替がほとんどなく、一人の排菌者がいると全館に菌がちらばります。

それとドヤのシーツは近頃割合白くなっています、シーツだけで中のフutonは以前に誰が寝たのかわかりま

せん。保固者が使ったすぐあとでは、菌が附着していることも考えられます。

釜に結核がふえているのに、保健所が原因を調査しないのはどういうわけでしょう。

自衛策としては、ドヤに定住している人は時々フutonを日干しすることです。

三、港灣の青（手帳）バス

センターの西側、南海線のガードの向う側から出ていた港灣青手帳の輸送バスが九月一ばいで廃止になりました。

十年前、港灣の青手帳ができたとき、青手帳の港灣日雇労働者が、それ以前は業者のマイクロバスが迎えにきていたのに、青手帳をとつたら、電車賃自前で港灣の安定所まで行かんなん、質下げたと怒り出し、大阪府労働部が港灣荷役近代化事業協会という外かく団体をつくり、手配師には、副知事が兼任している団体から「指導員」の辞令と手当を出して港區までの輸送バスを出すようになった。

はじめの頃は、三角公園から午前五時頃より六時まで約三十台のバスが出ていました。

